

「非定型抗酸菌症」 について 教えてください

呼吸器内科



久田哲哉

東京通信病院呼吸器内科部長

ひさだ・てつや

1955年生まれ。80年
東京大学医学部卒業。
専門は呼吸器内科全般

Q

2010年、身内の死亡や入院などでストレスがたまり、体調不良になりました。今年の2月に受診し、血液検査、喀痰検査、CT検査を受けた結果、「非定型抗酸菌症」と診断されました。軽症ということで、特に治療の必要はなく、年に1回程度受診するようと言われました。初めて聞く病名に驚き、詳しく尋ねることができませんでした。この病気について詳しく教えてください。

●74歳・女性 ●既往症 緑内障、老人性萎縮性胃炎、胃酸過多

A

まず病気の呼び名ですが、以前は「非定型抗酸菌症」と呼ばれていましたが、現在は「非結核性抗酸菌症」と呼ばれています。細菌の分類上、抗酸菌のグループには、結核菌も含めて数十種類の細菌が含まれると言われていますが、結核菌・らい菌以外の抗酸菌による感染症を非結核性抗酸菌症と呼びます。抗酸菌グループの中で、非結核性抗酸菌は種類も多

く、結核菌に比べて決して少ないわけではありません。通常、非結核性抗酸菌の中でヒトに感染症を起こすのは、マイコバクテリアウム・アピウム菌、マイコバクテリアウム・イントラセルラーレ菌、マイコバクテリアウム・カンサシ菌を中心に、10種類程度とされています。

非結核性抗酸菌は、水や土などの自然環境の中に普通に存在する菌で、通常は何らかの原因で吸入されても、痰となって排出されたり、肺の中で処理されて排除されるのですが、肺にたまってしまった場合に感染症を起こします。

ご質問者の場合、お身内が亡くなられたり入院されたりで体調不良になったことなどが感染に影響があったかもしれません。一般的に発病のきっかけはわかりませんが、以前は、体の弱った人やもともと

肺に病気をもっている人に起こると言われていましたが、現在では、健康な人にもしばしば起こることがわかっており、近年は患者さんの数が増えています。

抗酸菌症の中で、結核症との最大の違いは、菌の感染力が弱く、病状の進行が非常に遅く、ヒトからヒトにうつることはないという点です。一般的に、初期には症状がほとんどないことが多く、病状の進行もほとんど認められないことも多いのですが、病状が進行すると、息切れ、血痰などの症状が現れ、内服薬を中心とした治療が必要になります。しかし、投薬治療のみで根治することは非常に困難です。

ご質問者の場合、現在は軽症ということですから、治療は必要ありません。また、周囲の人との接触を含めて、日常生活上で制限すべきことは何もありません。発病や進行に栄養状態や体力などが関係するとも言われており、栄養のバランスのとれた食事、定期的な運動などが、進行を防ぐうえでも有用だと思います。そのうえで、年1〜2回は、胸部エックス線検査を含めて、定期的な診察を受けることをお勧めします。